

ユーラシアの民族移動と唐の成立

—近年のソグド人関係新史料を踏まえて—

石見 清裕

はじめに

表題のソグド人とは、イラン高原ではなく中央アジアを故郷とするペルシア系民族をいう。中央アジアのうちでも、特に今日のウズベキスタンを中心とする地域に分布した民族である。

そのソグド人が、紀元後一千年紀のユーラシア内陸交易の主たる担い手であったことは、夙にフランスの著名な東洋学者ポール・ペリオ Paul Pelliot が指摘した。ペリオは、1911年コレージュ・ド・フランスの中央アジア学講座開講記念講演で、当時の内陸シルクロード中継交易がソグド人の編成するキャラヴァン隊によって担われていたことを指摘し、ユーラシア史に果たしたソグド人の役割の重要性を強調したのであった。

『唐会要』巻99、康国の条には、

其の人は土著なれども、突厥に役属す。深目高鼻にして鬚髯多し。子を生めば必ず蜜を以て口中に食ましめ、膠を以て手の内に置く。其の成長して口に甘言を嘗め、銭を持つこと膠の物を黏けるが如きを欲するなり。習は商賈を善くし、分銖の利を争う。男子二十なれば、即ち之を他国に送り、来たりて中夏を過る。利の在る所、至らざる所無し。

と記される。商業に長けたソグド人の風習を伝える有名な史料であるが、末尾に記されるように彼らは中国にも到来した。ソグド人の故国は、中国では漢字で表記され、主なオアシス都市国家をあげれば次のとおりである。

サマルカンド＝康国、ブハラ＝安国、タシュケント＝石国、キッシュ＝史国、マイムルグ＝米国、カブダン＝曹国、等々。

そして、中国にきたソグド人は、故国の漢字表記によって姓を名乗った。この点も、夙に桑原隲蔵によって指摘された⁽¹⁾。すなわち、サマルカンド出身者ならば康姓、ブハラ出身者ならば安姓のごとくである。とすれば、唐の中ごろ（8世紀半ば）に安史の乱を起こした安祿山が想起されよう。彼は、父がブハラのソグド人、母が突厥（テュルク人）であったといわれ、祿山とともに首謀者の一人とされる史思明はケッシュのソグド人の血を引くという。いかにソグド人が中国史の展開に大きな影響をあたえたかがわれるであろう。

そればかりではない。主としてソグド人によってもたらされたであろう西方からの外来文化が、

唐代中国社会にあたえた影響についても、早くから注目された⁽²⁾。すなわち、唐代文学作品中に見える「胡姬」「胡人採宝譚」「胡旋舞」等のエキゾティズムであり、貴族・高官の墓に見られる絵画や三彩（駱駝・胡人俑）等々である。これらは、正倉院や法隆寺に伝わる宝物によって、わが国の古代文化にも影響をあたえたことは知られるとおりである。

ところが、20世紀末から今世紀にかけて、中国では各地でソグド人の墓が発見され、多数のソグド人墓誌が出土した。それらを読解してみると、どうやら従来のソグド人の姿（すなわちシルクロード交易にともなって唐代の中国に移住したと見るソグド商人の姿）とはことなるソグド人像を、われわれは想定する必要に迫られることとなってきた。

そこで、以下にそうしたソグド人のあり方を紹介し、それによって当時の民族の移動・移住について考えてみたい。

1 北朝末期（北周・隋代）のソグド人墓誌

まず、いくつか主な墓誌の録文を掲げよう。

（1）「^{あんか}安伽墓誌」（北周・大象元年、579年）⁽³⁾

- 1 大周大都督、同州薩保、安君墓誌銘
- 2 君諱伽、字大伽、姑藏昌松人。其先黃帝之苗裔。分
- 3 族因居命氏。世濟門風、代增家慶。父突建、冠軍
- 4 將軍、眉州刺史。幼擅嘉聲、長櫛望實。履仁蹈義、忠
- 5 君信友。母杜氏、昌松縣君。婉茲四德、握此三從。肅
- 6 睦閨闈、師儀鄉邑。君誕之宿祉、蔚其早令。不同流
- 7 俗、不雜塵。績宣朝野、見推里閭、遂除同州薩保。
- 8 君政撫閑合、遠迹祇恩。德盛位隆、於義斯在。俄除
- 9 大都督。董茲戎政、肅是軍容。志効雞鳴、身期馬革。
- 10 而芒芒天道、杳^囿神祇、福善之言、一何無驗。周大
- 11 象元季五月、遭疾終於家。春秋六十二。其季歲次
- 12 己亥十月己未朔、厝於長安之東。距
- 13 城七里。但陵谷易徙、居諸難息。佳城有默、鐫勒^囿
- 14 無虧。其詞曰、
- 15 基遙轉固、派久弥清。光踰照廡、價重連城。方鴻^等
- 16 鷺、警驥齊征。如何天道、奄^壑泉扃。寒原寂寞、曠野
- 17 蕭條。岱山終礪、拱木俄樵。佳城鬱鬱、隴月昭昭。緜^口
- 18 易[、]金石難銷。

安伽墓は、2000年に西安市北郊で発掘され、ゾロアスター教意匠をもつ石棺のパネルや墓門上部の壁画が注目された。さて、墓誌第2行によれば、墓主安伽は「姑藏」の人とされるので、彼

は河西地方より長安に移住した人物である。そして、第1行・7行には、彼は「同州薩保」に就任したと刻される。「同州」は現在の陝西省大荔であり、「薩保」とはソグド語 sartpaw の漢字音写であり、「薩宝」「薩甫」とも表記する。ソグド語 sartpaw はキャラヴァンの隊長を指すが、漢語の薩保は、隋以前ではソグド人集落のリーダーを指し、唐ではゾロアスター教徒の監督者を指す⁽⁴⁾。つまり、安伽は西魏・北周期の中国に生きた人であるから、その時期にすでにソグド人は中国に移住しており、さらに集落を形成していたことが知られるのである。

(2)「史君墓誌」(北周・大象2年、580年)⁽⁵⁾

漢文部分原文再建案

- 1 大周涼州薩保史君石堂
- 2 君諱…、其先史國人也。本居西域、
- 3 土…及派、遷居長安。
- 4 自他有燿、…水運應期、中
- 5 原顯美。…、日昌具德。祖阿
- 6 史盤陀、為本國薩保。父阿奴伽。並
- 7 懷瑾握瑜、重規疊矩。秀傑不
- 8 群、立功立事。少挺…名、又擅英
- 9 聲。而君秉靈山岳、…志。
- 10 大統之初、鄉閭推挹、出身為
- 11 薩保判事曹主。…五年、詔
- 12 授涼州薩保。而天道茫茫、沉
- 13 芳永歲。大象元年五月七日、薨於
- 14 家。年八十六。妻康氏、其歲六月七日薨。
- 15 以其二年歲次庚子正月丁亥朔廿
- 16 三日己酉、合葬永…縣壙。禮也。長子
- 17 毗沙、次維摩、次富鹵多、並有孝行。乃為
- 18 父造石堂一區、刊碑墓道、永播
- 19 …。

ソグド語部分の訳(吉田豊氏訳より抄訳)

偉大な(北)周の大象2年、鼠の年の第1の月の第23の日。

キッシュ国の姓で姑臧に住む者がいた。彼は皇帝より薩保に任命された。彼はソグドの地では顕貴で、ウィルカク Wirkak という名である。ワヌーク Wanuk の子であり、ワヌークは、ラシュトゥヴァンタク Rashtvandak の子である。彼の妻はセンペン Senpen (西平)で生まれ、名はウィヤーウシー Wiyausi という。薩保のウィルカクは、センペンで、猪の年の第6の月の第7の日、ウサギの日に結婚した。それから、彼はここフムタン Khumtan (長安)で、猪の年の第5の月の第7の日に死んだ。夫人も、第6の月の第7の日、ウサギ

の日に死んだ。結婚したのと同じ年に、月に、日に。

生まれて死を免れる人はいない。しかし、この世において、夫と妻がたまたまこの同じ年、この月、この日に互いに結婚し、また天国で同じ期間を過ごすことはさらに珍しい。

この石の墓室は、ヴレーシュマンヴァンタク Vreshmanvandak、ジェーマトヴァンタク Zhematvandak、フロートヴァンタク Frotvandak が作った。父母のために、ふさわしい場所に。

史君墓は、2003年に西安北郊で発掘された。ソグド意匠の彫刻を施された堂宇型の石槨に、扁額のように石板墓誌が掛けられていた。一般的な墓誌は正方形の石に刻する形態をとるが、本墓誌は異なっている。その石板に、右から3分の2ほどのスペースでソグド文が、残る部分に漢文が刻されていた。漢文の刻字は下手で、未刻文字が多い。しかし、中国の古典を踏まえると、ある程度は復元が可能である。上掲「原文再建案」はそうして作成した案である。したがって、漢文部分を撰文した者は中国古典に精通した人であったはずであるが、それにしては刻字がまるで素人である。一方、吉田氏によれば、ソグド文は書き慣れた者でなければ彫れない書き方だという。とすれば、漢文部分は漢人の撰文をもらったソグド人が彫ったものと見られる。

ソグド語部分によれば、墓主はウィルカクという名であるが、漢文では名にあたる部分が判読不能であり、そこで「史君墓誌」と呼んでいる。墓主は姑臧の人であり、涼州薩保の家柄であるので、キッシュから今日の武威に移住し、そこから長安に移ったと思われる。夫人はセンペン（西平）生まれであり、夫婦はそこで結婚したというから、西平にもソグド人集落があったと見てよい。ここからも、すでに北周期に涼州や西平にソグド人集落が存在したことがわかる。

漢文部分が決まった定型句にしばられているのに対し、ソグド文はより自由であり、人間味にあふれている。墓主の父の漢字名「阿奴伽」が Wanuk の、祖父の名「阿史盤陁」が Rashtvandak の漢字音写であり、子供の「毗沙」は Vreshmanvandak に、「維摩」は Zhematvandak に、「富鹵多」は Frotvandak に、それぞれ相当する。

(3) 「^{ぐこう}虞弘墓誌」(隋・開皇12年、592年)⁽⁶⁾

- 1 公諱弘字莫潘魚國尉紇麟城人也高陽馭運遷陸海□□□□□
- 2 膺錄徙赤縣於蒲坂奔葉繁昌派枝西域倜儻人物漂注□□□□
- 3 奴栖魚國領民酋長父君陁茹茹國莫賀去汾達官使魏□□□□
- 4 朔州刺史公承斯慶裔幼懷勁質紫脣燕頤白耳龜行鳳子□□□
- 5 之文洞閑時務龍兒帶煙霞之氣迥拔樞機揚烏荷戟之齡□□□
- 6 月之歲以公校德彼有慙焉茹茹國王鄰情未協志崇通藥□□□
- 7 芥年十三任莫賀弗銜命波斯吐谷渾轉莫緣仍使齊國文宣□□
- 8 煥爛披雲拘縶內參弗令返國太上控覽砂磧煙塵授直突都督□
- 9 使折旋歛諸邊款加輕車將軍直齋直盪都督尋遷使持節都督涼
- 10 州諸軍事涼州刺史射聲校尉賈逵專持嚴毅未足稱優郭汲垂信
- 11 童兒詎應擬媿簡陪閭闔奮吒驚適功振卷舒理署僚府除假儀同

12 三司遊擊將軍貂璫容良之形佩山玄玉之勢鄭表加賞五十万餘
 13 張華腹心同塗異世百貞親信無所媿也武平既鹿喪綱頽建德遂
 14 蚕食關左収珠棄蚌更悛琴瑟乃授使持節儀同大將軍廣興縣開
 15 國伯邑六百戸體飾金章銜轡簪笏詔充可比大使兼領鄉團大象
 16 末左丞相府遷領并代介三州鄉團檢校薩保府開皇轉儀同三司
 17 勅領左帳内鎮押并部天道茫昧災眚斜流九轉未成刈蘭湓盡春
 18 秋五十有九薨於并第以開皇十二年十一月十八日葬於唐叔虞
 19 墳東三里月皎皎於隧前風肅肅於松裏鑄盛德於長夜播徽猷於
 20 萬祀迺爲銘曰
 21 水行馭曆重暉号奇隆基布政派胤雲馳潤光安息輝臨月支簪纓
 22 組綬冠盖羽儀桂辛非地蘭馨異土翱翔數國勤誠十主扣響成鐘
 23 應聲如鼓蘊懷仁智纂斯文武緩步丹墀陪遊紫閣志閑規矩心無
 24 □□**秋**夜揮絃春朝命酌彩威鱗鳳壽非龜鶴前鳴笳吹後引旗旌
 25 □□□□□□新□□□□□□□□□□□□玉□永□□局

虞弘墓は、1999年に山西省太原市の南方で発掘された。五代・宋初まで存在した旧太原の付近である。墓誌第1行・3行には、墓主の出身を「魚国」としているが、魚国の比定は困難である。しかも、墓誌石を見ると、2つの「魚」字は削って彫りなおしており、謎が多い。

墓誌第3行には、虞弘の父は「^{じょじょ}茹茹国の莫賀去汾達官」に就任したとあるので、父親の代には茹茹に移り住んだと見られる。茹茹とはいうまでもなく柔然のことで、突厥が勃興する前にモンゴリアを支配していた強力な遊牧帝国である。東西突厥可汗国内にソグド人が入り込んでいたことはこれまでも知られていたが、この一族はそれよりも早くにモンゴリアの遊牧政権下に入っていたのである。第7行を見ると、虞弘は13歳のときに波斯（ペルシア）と吐谷渾（青海地方）に使者として派遣されているが、これはおそらくは国際間の使節としての訓練だったであろう。その後、彼は中国の北齊に使者として派遣されたが、ちょうど彼が中国滞在中に柔然が突厥によって滅亡され、虞弘は帰る国を失ってしまった。やむなく彼は華北にとどまり、北周・隋の政権下に入ったのである。

注目すべきは、第16行に「并・代・介三州郷団を領し、薩保府を檢校」したと記される点である。并州は山西省太原、代州は同代県、介州は同汾陽県にあたり、いずれも山西省を南北にたぐり要衝にあたる。とすれば、北周期にはすでに山西の要地にソグド人集落が存在したことになる。

以上のほかにも紹介すべき墓誌史料は存在するが、この3点の墓誌を見るだけでも、唐が建国されるよりもずっと前に、すでにソグド人が中国に移住していた様子が知られるであろう。

2 固原の史氏一族

寧夏回族自治区の固原は、六盤山の東麓の高原に位置する。河西の武威から東行して中衛付近で黄河を渡り、清水河に沿って上ると、自然と行き着く地形である。河西地方と長安方面との中

繼地にあたる。

この地で、ソグド人史氏一族墓六基が発掘され、七点の墓誌が出土した。それらは二つの血統に分かれる。一つは史射勿ししゃぶつの系統であり、史射勿とその息子にあたる史訶耽し か たん・史道洛、および訶耽・道洛の甥の史鉄棒の4人である。もう一つは、史索巖とその妻安娘あんじょう、および彼らの甥にあたる史道德の3人である。このうち、史射勿系が薩宝の家柄であり、史索巖系より格が高い。今、ここでは史射勿の息子である史訶耽夫妻の墓誌を提示してみよう。

(1)「史訶耽夫妻墓誌」(唐・咸亨元年、670年)⁽⁷⁾

- 1 唐故游擊將軍・虢州刺史・直中書省史公墓誌銘并序君、諱訶耽、字説、原州平高縣人、史國
- 2 王之苗裔也。若夫奔奔崇基、分軒丘而吐胃、悠悠遠派、掩嬌水而疏疆。從層構於天街、族高河
- 3 右、系芳蕤於地緒、道映中區。瓜瓞滋繇、羽儀紛藹。斯並煥乎家諫、刊夫國史。曾祖尼、魏摩訶大
- 4 薩寶・張掖縣令。祖思、周京師薩寶・酒泉縣令。父隋、隨左領軍驃租將軍。岸宇崇務、冠雲霞而峙
- 5 秀。韶姿散朗、潤河漢而澄瀾。化光列邑、聲華制錦、演三略於珠韜、申百中於銀鐃。君、濯質五材、
- 6 資神六氣。夙成表於學歲、雅操著於冠年。琬琰為心、掩藍田而玉潤、芝蘭在佩、跨玄圃以騰芳。
- 7 是以、金城之右、猶潁川之仰叔度、玉關之外、若衛人之宗端木。既而、齠年敬業、弱歲騰暉。隨開
- 8 皇中、釋褐平原郡中正。晨朝州府、清言激流水之聲。暮還貴里、列騎動浮雲之色。執心貞實、不
- 9 用竒譎效能。栖神澹雅、豈以風華馳譽。屬隨祚棟傾、蝟毛俱起。黠賊薛舉、剖斷幽岐。擁豕突之
- 10 竒兵、近窺京輔、假狐鳴以挺禍、充仞王畿。高祖太武皇帝、建旗晉水、鞠旅秦川。三靈之命有
- 11 歸、萬葉之基爰肇。君遂閒行險阻、獻款宸極。義寧元年、拜上騎都尉、授朝請大夫、并賜名馬・
- 12 雜綵。特勅北門供奉進馬。武德九年、以公明敏六閑、別勅授左二監。奏課連最、
- 13 簡在屢聞。尋奉勅直中書省、翻譯朝會。祿賜一同京職。貞觀三年、加授宣德郎。七年、又
- 14 加授朝請郎。九年、又加授通義郎。十三年、又加授朝議郎。十九年、丁母憂。集蓼崩魂、匪莪纏痛。
- 15 同子羔之泣血、浚叔山之荒毀。永徽四年、有詔「朝議郎史訶耽、久莫中書、勤勞可錄、可游擊將

- 16 軍。莫中書省翻譯如故」名叅省禁卅餘年、寒暑不易其勤、終始弥彰其恪。属日月休明、天地圓
- 17 觀、爰及昇中告禪。於是更錫崇班、是用超遷、出臨方岳。乾封元年、除虢州諸軍事・虢州刺史。□
- 18 檐望境、威竦百城、揚扇弘風、化行千里。君、緬懷古昔、深惟志事。察兩曜之盈虛、寤二儀之消息。
- 19 眷言盛滿、深思抱退、固陳衰朽、抗表辞榮。爰降 詔曰「游擊將軍史訶耽、久經供奉、年方耆艾、
- 20 請就閑養。宜聽剝仕、遂其雅志」仍賜物五十段。至若、門馳千駟既無驕侈之心。家累万金自有
- 21 謙撝之譽。享年八十有六、以總章二年九月廿三日、遭疾終於原州平高縣勸善里舍。嗚呼、哀
- 22 哉。夫人康氏、甘州張掖人也。父阿孩、随上開府・右御衛合黎府鷹揚郎將。夫人、陽臺降祉、洛渚
- 23 騰華。年甫初笄、作嬪君子。恭薦蘋藻、叶和琴瑟。伍春芒迫、逝水不留。永閔玄扃、長歸厚夜。春秋
- 24 卅、以貞觀四年九月十日、終於雍州長安縣延壽里第。後妻張氏南陽夫人、南陽郡西鄂人也。
- 25 父玄克州任城縣令。道風素業振動名流、凝績細圖、騰哥青史。夫人、天姿柔婉無愆四德之儀、
- 26 神賦幽閑豈待七篇之誡。既備有行之禮、遂紆 玄造之澤。於是授南陽郡君。而徒催景、玉樹
- 27 驚秋、飄日忽沉、翻霜遽盡。春秋五十有四、以乾封二年正月一日、遭疾終于平高縣勸善里第。
- 28 粵以咸亨元年十一月廿七日、合葬於原州之平高縣城南百達原。惟君、玄情冲素、雅志虛遠。
- 29 自怡閭里、罕從犬馬之遊。逍遙甲第、未聞聲色之好。不以居高傲物、不以智識凌人。澹情譽毀
- 30 之間、灰心名利之境。可謂人英時傑、令德具美者焉。胤子護羅・懷慶等、躋厚載以長號、仰高旻
- 31 而雪泣。嗚呼、哀哉。天沉去日、地隔窮泉。松庭無風月之賞、蒿里異冠盖之路。白驥踟於山門、黃
- 32 鳥吟於風樹。刊銘頌以紀迹、随陵谷而垂裕。迺為銘曰、 蒲海設險、葱山作鎮。地号金方、
- 33 人稱王振。排霜表節、臨風吐韻。履行依仁、抗言必信。^{其一}無厭火德、運属大明。重懸七政、再紐八
- 34 紘。爰披榛梗、謁款天京。藩條衍頌、鴛沼飛名。^{其二}英淑之媛、高梁

之家。芳凝蘭蕙、色茂鉛華。循圖
35 檢溢、顧禮防奢。連披夕霧、日上朝霞。^{其三}青鳥靡效、白雪空傳。風
枝未靜、隙馬逾邁。遽遷夜壑、徒
36 悲逝川。泉扃既掩、朧月室懸。^{其四}咸亨元年歲次庚午、十一月庚
子朔廿七日景寅勒。

この墓誌は長文であり、東洋史研究者から見れば種々の分野でまさに史料の宝庫なのであるが、今は本稿のテーマに沿って新知見を抽出してみたい。

まず、第1～2行に「史国王の苗裔」とあるので、墓主史訶耽の出自はキッシュのソグド人と見て間違いなく、3～4行によれば曾祖父・祖父は薩宝であった。史訶耽の事績で殊に注目されるのは、第9行に「黠賊薛挙^{せつきょ}」の名が見えることである。薛挙とは、隋末の乱における群雄の一人で、金城（蘭州）を拠点に国号を秦と称して、東方の長安に迫ってきた。当時の長安には、すでに山西太原から李淵が入城しており、国号唐を建てていた。建国したばかりの唐にとって、当初の最大の問題はこの薛挙の圧力であった。墓誌によれば、史訶耽は唐に帰順して薛挙の軍と戦ったとあるので、固原のソグド人勢力は唐初期の最大の問題の解決に一肌脱いたのである。実は、史訶耽の父史射勿の墓誌によれば、史射勿は北周・隋の軍人として幾度となく軍事遠征に参加している。もちろん、それは彼一人が従軍したのではなく、固原のソグド郷兵を率いてのことである。史訶耽の行動も、父の郷兵を引き継いだものと見なければならぬ。彼らは決して商人などではなく、むしろ軍人なのである。

（2）固原と唐の監牧

「史訶耽墓誌」第12行には、「北門供奉進馬」の官職が見える。北門とは長安城宮城の北門「玄武門」を指し、「進馬」とは殿中省の属官である。『旧唐書』卷四四、職官志三、殿中省尚乘局の条に、

進馬六人（七品下）。

とあり、『新唐書』卷四七、百官志二、殿中省左右杖廐の条に、

進馬五人、正七品上。

とある。殿中省の尚乘局もしくは左右杖廐は、閑廐（宮中の養馬施設）の運営を管轄する。墓誌文第12行の後文「六閑」は、その閑廐を指す⁽⁸⁾。

ところで、『唐会要』卷七二、諸蕃馬印、康国馬の条には、

武徳中、康国、四千匹を献ず。今時の官馬は、猶お是れ其の種なり。

とあり、唐初代皇帝高祖の武徳年間にサマルカンドが馬頭を献上したと見えるが、『冊府元龜』卷九七〇、外臣部朝貢三には、

（武徳）七年……六月、康国・吐谷渾及び西突厥の莫賀咄可汗、七月、百濟・康国・曹国、並びに使いを使わして朝貢す。

とあるので、この献上は武徳7年（624）のことに違いない。とすれば、史訶耽は閑廐の属官としてこれらの馬の管理を担ったと見てよいであろう⁽⁹⁾。そして、北門で馬の管理をしていたので

あれば、2年後の武徳9年6月4日に、高祖の次男の李世民（後の第2代太宗）が兄の皇太子と弟を殺害して政権を奪った玄武門の変にかかわらなかったはずがない。史訶耽は、李世民のクーデターに加担したのである。

さらに、墓誌文第12行には、史訶耽が「左二監」に就任したと記される。この「左二監」とは、唐の牧監（国営牧場）の一つであり、唐・開元二十五年令「厩牧令」（北宋「天聖令」厩牧令、不行唐令第一八条）に、

諸所牧は、細馬・次馬監を左監と称し、鹿馬監を右監と称せ。仍りておのおの第を起こし、一に次を以て名と為せ。馬、五千匹以上に満つるを上と為し、三千匹以上を中と為し、三千匹に満たざるを下と為せ。其の雑畜の牧は、みな下監と同じくせよ。〔其の監は、仍りて土地を以て名を謂え。〕

と規定されている。つまり、「左」とは細馬（駿馬）・次馬を管理する「左監」の意であり、数字の「二」は設置順の番号を指す。史訶耽は、唐で二番目に設置された良馬の牧場の監督官に就任したのである。

実は、固原の史氏墓誌を見ると、史鉄棒は「右十七監」に、史道德は「玉亭監」「蘭池正監」という牧監に就任している。彼らは、唐の馬政と密接に関わっていたのである。

『元和郡県図志』巻三、関内道三、原州（固原）の条には、

監牧、貞観中、京師の東の赤岸沢自り馬牧を秦・渭二州の北、会州の南、蘭州狄道県の西に移し、監牧使を置きて其の事を掌らしむ。仍りて原州刺史を以て都監牧使と為し、以て四使を管す。南使は原州の西南一百八十里に在り、西使は臨洮軍の西二百二十里に在り、北使は理を原州城内に寄せ、東宮使は理を原州城内に寄す。天宝中、諸使共に五十監有り。

と記される。ここに見える、北は会州、西は蘭州狄道県、南は秦・渭二州の北、東は原州に至る地域に分布する五十監もの牧場群は「隴右監牧」と称され、唐の馬政の最も重要な供給源を形成した。そして、その総責任者たる「都監牧使」は原州刺史が担ったのである。固原が唐の軍馬供給にいかにか大きな役割を果たしたかが知られるであろう⁽¹⁰⁾。

各牧監では、幼馬の段階で閑厩に入れる候補の馬とそうでない馬とに分けられ、前者の良馬に「飛」印が押されて訓練を施し、三歳の最良馬が「三花」印を押されて閑厩に送られたのである⁽¹¹⁾。

なお、「史訶耽墓誌」文第13行には「中書省に直して朝会を翻訳す」とあるので、彼は左二監を辞めた後は朝廷の通訳官を務めた。第22行に「夫人康氏」が見え、最初はソグド人どうして結婚したが、妻と死別した後は、第24行に「後妻張氏」とあるので漢人女性と結婚したようである。これは、通訳官として長安での生活が日常的になったからであろう。

3 新出墓誌より見えるソグド人のあり方

以上の墓誌より見てとれるのは、ソグド人とは決して商人ではなく、むしろ軍人であり、さらに彼らの祖先は唐が建国されるよりも以前に、遅くとも北魏末期には中国に移住していたことである。

以下は、墓誌の全文を掲げることは煩瑣なので控えるが、たとえば隋・開皇9年(589)「安備墓誌」⁽¹²⁾には、

君名備、字五相、陽城縣龍口鄉曹劉里人。其先出於安居耶尼國、上世慕中夏之風、大魏入朝。君、名は備、字は五相、陽城縣龍口鄉曹劉里の人なり。其の先は安居耶尼国より出で、上世に中夏の風を慕い、大魏に入朝す。

と刻され、また唐・顯慶2年(657)「康子相墓誌」⁽¹³⁾には、

君諱子相、河南洛陽人也。其先出自康居、仕於後魏爲頡利發。陪從孝文、粵自恒安入都歲洛。君、諱は子相、河南洛陽の人なり。其の先は康居より出で、後魏に仕えて頡利発と爲る。孝文に陪從し、粵に恒安より歲洛に入都す。

と記される。以上は一部であるが、彼らソグド人が「大魏」「後魏」(いずれも北魏の意)の時代になすでに中国に移住している様子が知られよう。

また、唐・永徽6年(655)「曹^{そう}怡墓誌」⁽¹⁴⁾には、

君諱怡、字願影、隰城人也。……父遵、皇朝介州薩寶府車騎騎都尉。君稟靈海嶽、……起家元從、陪翊義旗、後殿前鋒、殊功必致。於是授公騎都尉、用旌厥善。

君、諱は怡、字は願影、隰城の人なり。……父遵は、皇朝の介州薩寶府の車騎騎都尉なり。君は靈を海嶽に稟け、……元從に起家し、義旗に陪翊し、後殿前鋒、殊功必ず致せり。是に於て公に騎都尉を受け、用て厥の善^{あら}を旌わす。

と刻されている⁽⁸⁾。墓主曹怡の父は介州薩寶府車騎騎都尉であった人物で、曹怡自身は李淵の太原挙兵に従軍したという。それは、父以来のソグド人郷兵を率いてのことに相違なく、固原の史氏一族と同様に、ソグド人が唐の建国に直接関わった姿を我々に示しているのである。

さらには、唐・天寶4載(745)「康^{れい}令^{いうん}憚墓誌」⁽¹⁵⁾には、

君諱令憚、字善厚、其先汲人也。……家於長安。曾祖朝、王佐嶽秀、侯度玉立。屬隨季天壓、唐初日躋、天子龍飛於晉陽、諸侯駿奔於寰宇。……以公折衝樽俎、拜爲驃騎將軍。名遂功成、樂天知命、以保終吉、殘無其他。

君、諱は令憚、字は善厚、其の先は汲の人なり。……長安に家す。曾祖の朝は、王佐たること嶽のごと秀で、侯度たること玉のごと立つ。隋季に天圧し、唐初に日躋^{のぼ}るに属し、天子晉陽に龍飛し、諸侯寰宇に駿奔す。……公の折衝樽俎を以て、拜して驃騎將軍と爲す。名遂げ功成り、天を楽しみ命を知り、以て終吉を保ち、残すに其の他無し。

と記される。文中の「折衝樽俎」とは、外交上の高い手腕をいう表現である。この墓誌によれば、康令憚の曾祖父康朝は、前掲の曹怡が李淵の太原挙兵に従軍したのとは逆に、長安にいて李淵の軍を迎え入れる功績が称えられたと思われる。いかに、彼らソグド人が北朝から唐初期にかけての華北の政局に深く関わっていたかがわかるであろう。

むすび

中国におけるソグド人コロニーといえ、かつて池田温氏が明らかにされた敦煌の徙化郷が想起されるであろう⁽¹⁶⁾。徙化郷ほど集落の構成員までがわかる訳ではないが、新出墓誌によれば、

敦煌・武威などの河西地方のほかにも、長安および雍州（長安一帯）、同州、西平、夏州、并州、代州、介州、原州（固原）、岐州、定州等々にもソグド人集落の存在が知られる。しかも、それらは唐の建国よりも前に形成されている。そして、彼らは決して商人ではなく、むしろ軍人としての性格が強い⁽¹⁷⁾。

従来、ソグド人の中国への移動・移住については、東突厥第一可汗国が唐に滅ぼされ、さらに唐の勢力が西突厥の地にまでおよぶと、それまで遊牧権力に依存していたソグド人の交易は保護者を失い、そこで彼らは新しい唐の権力に依存するようになり、やがて中国にまで交易の範囲を広げた、と考えられてきた。したがって、ソグド人といえば商人と認識されたのである。この考え方は決して間違っただけはおらず、事実彼らが唐と盛んに交易したことは、荒川正晴氏が委曲を尽くして論証されたとおりである⁽¹⁸⁾。

また近年では、突厥より唐に來住した、ソグドと突厥両方の生活文化を身に着けた「ソグド系突厥」人という概念も知られる⁽¹⁹⁾。この場合は、武人であるソグド姓の者がいても何ら不思議ではなく、事実そういう人間が唐代中国にいたことは認められる。

ただし、それらばかりが中国に移住したソグド人の姿ではない。それ以前に華北に來住し、各地に集落を形成し、北齊・北周の抗争、隋の一時的統一と隋末の乱などの政局の不安定から、自己の郷兵を率いて行動し、挙句の果てには唐の成立に直接的に関わる者も現れた、そういうソグド人の姿をわれわれは認識すべきなのである。

あらためて考えれば、そもそも隋や唐を建国した人たちが外来の移住者である。隋の王族楊氏はもとは普六茹氏^{ふろくじょ}といい、唐の王族李氏は大野氏^{たいや}といい、内蒙古自治区の陰山東麓にあった武川鎮の出身である。それが北魏末期の六鎮の乱によって南下し、のちに隋・唐を形成した。中国史に五胡十六国時代をもたらした、隋・唐形成の道を開いた六鎮の乱に至るまでの民族移動は、ヨーロッパのゲルマン民族大移動と連動するユーラシアのうねりであり、その際にソグド人たちも動いたのである。このように考えれば、彼らが唐建国に関わったとしても、何らおかしくはない。

わが国の古代史でソグド人というと、法隆寺に伝わるソグド語の焼印が押された香木や、『続日本紀』天平8年（736）8月庚午の条に、天平の遣唐使の中臣名代が帰朝した時のこととして、

入唐副使、從五位上、中臣朝臣名代ら、唐人三人、波斯一人を率いて朝を拝す。

とある記事が思い起こされる。「波斯」とはペルシアを指すが、ここはササン朝ペルシア人と見るよりはソグド人を指している可能性が高いと思われる。日本の場合は、ソグド人との関係はこのくらいかもしれない。しかしながら、日本古代史でいう西文氏・秦氏・東漢氏など4～5世紀の「渡來人（歸化人）」の列島移住は、上述の大陸での民族移動現象の余波と考えてよいのではなかろうか。

注

（1）桑原隲藏「隋唐時代に支那に來往した西域人に就いて」（初出1926年、『桑原隲藏全集』第2巻所収）。

（2）こうした研究の古典的なものをあげれば、石田幹之助『長安の春』（創元社、1941年、平凡社東洋文庫、1967年等）、向達『唐代長安と西域文明』（生活・読書・新知三聯書店、1957年等）、Berthold Laufer, *Sino-Iranica*, Chicago, 1919（杉籟夫訳『古代イランの文明史への中国の貢献』新風舎、2007年）、Edward H.

- Schafer, *The Golden Peaches of Samarkand*, University of California Press, 1963 (吉田真弓訳、伊原弘監修『サマルカンドの金の桃』勉誠出版、2007年)等。
- (3) 陝西省考古研究所編著『西安北周安伽墓』(文物出版社、2003年)、ソグド人墓誌研究ゼミナール「ソグド人漢文墓誌訳注(9) 西安出土「安伽墓誌」(北周・大象元年)」(『史滴』34、2012年)。
- (4) 吉田豊「ソグド語雜録(Ⅱ)」(『オリエント』31—2、1989年)、荒川正晴「北朝隋・唐代における「薩宝」の性格をめぐる」(『東洋史苑』50・51合併号、1998年、同氏著『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』名古屋大学出版会、2010年、第2章第1節)。
- (5) 西安市文物保護考古研究院・楊軍凱『北周史君墓』(文物出版社、2014年)、石見清裕「西安出土北周「史君墓誌」漢文部分訳注・考察」(森安孝夫編『ソグドからウイグルへ』汲古書院、2011年)、吉田豊「西安出土北周「史君墓誌」ソグド語部分訳注」(同上)。
- (6) 山西省考古研究所等編『太原隋代虞弘墓』(文物出版社、2005年)、ソグド人墓誌研究ゼミナール「ソグド人漢文墓誌訳注(8) 太原出土「虞弘墓誌」(隋・開皇十二年)」(『史滴』32、2011年)。
- (7) 寧夏回族自治区固原博物館・羅豐編著『固原南郊隋唐墓地』(文物出版社、1996年)、寧夏回族自治区固原博物館・中日原州聯合考古隊編『原州古墓集成』(文物出版社、1999年)、ソグド人墓誌研究ゼミナール「ソグド人漢文墓誌訳注(2) 固原出土「史訶耽夫妻墓誌」(唐・咸亨元年)」(『史滴』27、2005年)。その他の固原史氏一族墓誌については、同「ソグド人漢文墓誌訳注(1)～(9)」(『史滴』26～32、2004～2010年)参照。
- (8) 唐の閑廐については、林美希「唐前半期の閑廐体制と北衙禁軍」(『東洋学報』94—4、2013年)参照。
- (9) 李錦繡「史訶耽与唐初馬政—固原出土史訶耽墓誌研究之二」(『欧亞学刊』10、2012年)。
- (10) 山下将司「唐の監牧制と中国在住ソグド人の牧馬」(『東洋史研究』66—4、2008年)。
- (11) 林美希「唐前半期の厩馬と馬印—馬の中央上納システム—」(『東方学』127、2014年)。
- (12) 胡戟・榮新江『大唐西市博物館藏墓誌』(北京大学出版社、2012年)上冊 p.24、葛承雍「祇教聖火芸術的新発見—隋代安備墓文物初探」(『美術研究』2009—3)。
- (13) 曹建強・馬旭銘「唐康子相墓出土的陶俑与墓誌」(『中原文物』2010—6)。
- (14) 王仲璋主編『汾陽市博物館藏墓誌選編』(三晋出版社、2010年) p.2、山下将司「唐の太原挙兵と山西ソグド軍府—「唐・曹怡墓誌」を手がかりに—」(『東洋学報』93—4、2012年)。
- (15) 王育龍「唐長安城東出土的康令暉等墓誌跋」(『唐研究』6、2000年)。
- (16) 池田温「8世紀中葉における敦煌のソグド人聚落」(同氏『唐史論攷—氏族制と均田制—』汲古書院、2014年、初出1965年)。
- (17) 武人としてのソグド人の姿については、山下将司「隋・唐初の河西ソグド人軍団—天理図書館蔵『文館詞林』「安修仁墓碑銘」残巻をめぐる—」(『東方学』110、2005年)、福島恵「唐の中央アジア進出とソグド系武人—「史多墓誌」を中心に—」(『学習院大学文学部研究年報』59、2013年)、同「北朝隋唐期におけるソグド人の東方移住とその待遇—新出墓誌史料を中心に—」(『唐代史研究』16、2013年)参照。
- (18) 荒川正晴、前掲『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』。
- (19) 森田豊『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』(関西大学出版部、2010年)、特に第3章・4章・5章。中田裕子「唐代六胡州におけるソグド系突厥」(『東洋史苑』72、2009年)。